

「秋の北極圏旅行記 (15)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

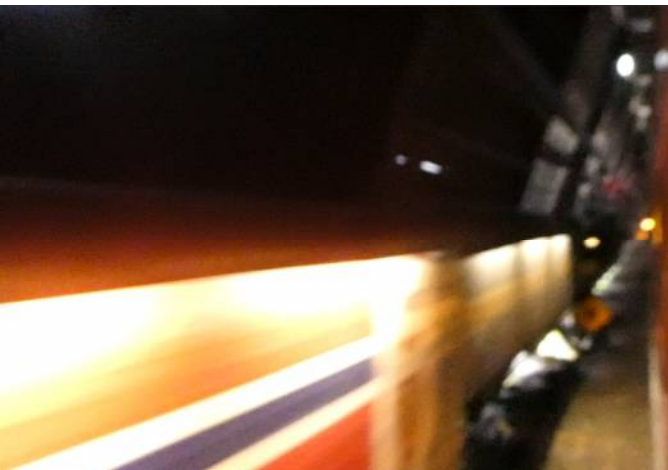
田中 千尋 Chihiro Tanaka



列車はノルウェーとの国境地帯にさしかかり、大きなロッジが見えてきます。ここは「リクスグレンセン」というスウェーデン最北のスキーリゾートです。



スウェーデン最後の駅名も「リクスグレンセン駅」です。スウェーデン語でそのまま「国境」という意味です。何人か降りた人もいました。



リクスグレンセン駅を出るとすぐに長いトンネル

に入ります。そのトンネルの壁面に国旗色の塗装があり、スウェーデンからノルウェーに入ったことがわかります。国道での国境通過時同様、特にパスポートチェックや入国審査はありません。「シェンゲン条約」に加盟している EU の国は「一つの国」と見なされ、一度どこかの国に入国してしまえば、何度国境を通過しても、基本的に出入国の審査は省略なのです。旅行者としては楽ですが、パスポートに訪問国の証拠が何も残らないのが、残念っちゃー残念ですね。



この列車 (S J インターシティ 98 列車) は、スウェーデン側の小さな駅はすべて通過で、停車駅はわずか4駅で、事実上急行列車の扱いでした。しかしノルウェーに入ると、小さな駅もすべて停車します。日本でいえば「区間準急」みたいな感じですね。こんな駅で誰も乗り降りしないと思っていたら、地元の人と思われる方が結構乗降していて驚きました。ノルウェー側では意外と生活の足にもなっているようです。



このビューレンフェルという駅は、標高 513.7m で、この路線で最高地点です。終点のナルビクは港町の駅なので、ここから一気に 500m の標高差を下ることになります。編成の短い旅客列車は良いですが、長大な貨物列車にとっては、大変な標高差でしょう。



アビスコで大半の乗客が降り、ノルウェーの小駅でも少しずつ降りたので、乗車時はほぼ満員だった車内も、すっかり閑散としてしまいました。この時点で列車は1時間半の遅れ。帰りの列車に乗れるか心配で車掌さんに聞くと、「この列車がそのまま折り返すから心配ないのサ！」と教えてくれました。あっそう。



国境を越えると、車窓風景は更に荒涼としてきます。針葉樹も白樺の灌木などの植生も消え、岩と草だけのツンドラ地帯になります。



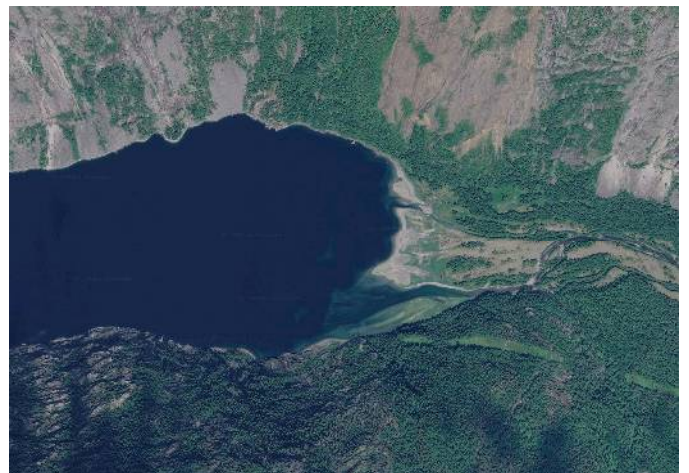
このあたりは別荘地帯です。持ち主はフィンランド人が多いそうです。土壌がほぼ無いので、岩の上に直接建てられている建物が多いです。



このフィヨルドの崖上の小駅にも停まりました。おばあちゃんと赤いセーターの孫娘と思われる二人が乗ってきました。普段着で買い物袋を持っていたので、ナルビクに買い物に行くようです。しかし列車が遅れていて、買い物の時間はあまりなさそうです。



右車窓についてフィヨルドの末端（最奥部）が見えてきました。このような最奥部の平地には、小さな集落があることも多いのですが、このフィヨルドはあまりにも切り立っているので、道路も家もありません。



列車からの眺めは「真上から」とまではいきませんが、この航空写真と大差なく、列車に乗っているというよりも遊覧ヘリコプターに乗った気分でした。